

岩石城と 小次郎

GAN JAKU MON

佐々木小次郎

不明／1612年4月13日

巖流島の決闘の疑惑

慶長17(1612)年4月13日。関門海峡に浮かぶ小さな島・巖流島。約束の時間に遅れてやってくる宮本武蔵——
「遅いぞ武蔵！」

テレビや漫画でお馴染みの名シーンですが、このイメージはすべて吉川英治氏の小説『宮本武蔵』がベースとなっています。そしてこの小説の基となったのは、巖流島の決闘から約140年後に書かれた『二天記』という書物でした。

決闘について書かれた最も古い記述は、武蔵の養子・宮本伊織によつて建てられた『小倉碑文』に刻まれています。決闘シーンでは「両雄同時に相会す」とあります。こちらでは武蔵は遅

てこないよう約束し、試合を行ったが、小次郎が打ち殺されてしまった。

小次郎は約束通り弟子は一人も来なかったが、武蔵の弟子は隠れていた。

小次郎はその後蘇生したが、武蔵の弟子たちに殺された。この事が小次郎の弟子たちに伝わり、武蔵を打とうと大勢でひく島へ向かった。武蔵は門司へ渡り、延元様を頼りに助けを求めたので、城中にかくまい、武蔵は難を逃れる事ができた。その後武蔵を石井三之丞という馬乗りに鉄砲の者をつけて無事に豊後へ送り届け、無二齋(武蔵の父)に渡した。(要約)

なんと小次郎はまだ生きていて武蔵の弟子たちに殺されたというのです。しかも武蔵は門司城にかくまわれ、馬と鉄砲までつけて豊後へ送り届けられるという格別の待遇。これは単なる武芸者同士の闘いではなさそうです。おそらく小次郎が勝つたとしても隠れた者たちに殺されていたでしょう。もしもこの決闘が藩の謀略だったとしたら、決闘という方法で小次郎を始末しなければならなかった藩側の理由があるはず。こうした疑問から見えてくるのが、豊前・岩石城を居城としていた佐々木一族との接点なのです。

小次郎は岩石山で育った？

小次郎の出生について『二天記』では越前の生まれとされていますが、それには根拠がありません。しかし近年、有力な説として注目を集めているのが、鎌倉時代より豊前の地頭として添田を治めていた佐々木一族の出身とする説です。しかも豊前で佐々木性を名乗る豪族は添田の佐々木家のみです。

当時の添田は英彦山を中心とする修験道が栄興を極めた

刻していないことになっています。もともと信頼できるとすれば武蔵本人が書いたものですが、武蔵の著書に巖流島の件は1行も見つかりません。まるで何も語りたくないかのようです。

今まで小次郎は武蔵と一対一の決闘で武蔵の一撃で絶命したとされてきました。しかしそれを覆す記録があったのです。門司城代・沼田延元の記録をもとに綴られた『沼田家記』(1672年)です。延元は小倉藩細川家の家老で、決闘は延元が門司城代だった時代。延元もこの件に関わっていると考えられ、その信憑性は極めて高いとされます。——家記によれば豊前と長門の間(関門海峡)のひく島(巖流島)で、双方弟子は一人も連れ

時代。周辺大名の支配から独立を守るため、英彦山の山伏たちは修験道とともに武芸にも励みました。英彦山の麓に位置する岩石山もまた英彦山の配下であり、岩石山を治める佐々木一族は当然に英彦山との深い関係がありました。

小次郎の武芸はこうした山伏たちの兵法を学び、幼い頃から岩石山で修業を積み剣を極めたのではないかと考えられるのです。なにより小次郎の「巖(岩)流」は「岩石山」に由来し、さらに小次郎が使っていた刃長3尺余(約1メートル)の野太刀(通称・物干し竿)も、山伏たちが使用していた杖(錫杖・しゃくじょう)を思い起こさせます。

江戸時代になり、剣術の腕を見込まれた小次郎は細川家の兵法指南役に召し抱えられました。しかし依然として佐々木一族は英彦山を背景とした勢力で藩を脅かす存在。小次郎の仕官は佐々木一族の動きを見張るためとも考えられますが、小次郎自身の力が次第に大きくなるのを恐れた藩は、小次郎の抹殺を考える……それがこの巖流島の決闘だったのでは——武蔵が決闘を語らないのは、こうした仕組まれた決闘だったからではないでしょうか。小次郎の死後、佐々木一族は小倉藩により排斥され一族全員が刀を置いていきます。

岩石山頂上の岩には修験の場であることを示す梵字が刻まれています。小次郎も岩石山で山伏剣法の技を身につけようと山を駆け巡っていたかもしれません。岩石山に登ると、純粹無垢な一人の若武者をふと想像してみたくくなります。日本一の剣士を夢見て、岩石山の頂に立つ若き日の小次郎の姿を。

